

62 17世紀イギリスにおけるアルコールの害と『オセロー』

遠藤 花子

日本赤十字看護大学

17世紀のイギリスにおいて、飲酒が起因する社会問題はイギリス各地で起きていた。中世から、犯罪、暴力、無秩序といった問題の主な原因は、酒の過剰摂取であったこと、更には、飲酒が泥棒、売春、密通、不義、殺人なども招いていたことが確認されている。一方で、宴の席において、飲酒を拒否したために事件に発展してしまった例も認められている。この当時活躍していた劇作家、ウィリアム・シェイクスピア（1564-1616）の作品でも、飲酒は最も多くみられる場面の一つである。その中には、飲酒が宴を盛り上げる祝祭的な場面となっているものもあるが、過剰な飲酒が悲劇的な結末をまねく要因となっている場面もある。特に『オセロー』は、イタリアの將軍でムーア人のオセローの幸福な結婚が彼の旗手であるイアーゴの嫉妬と憎悪によって破滅される戯曲だが、この中で飲酒がオセローを窮地に陥れるための手段の一つとなっている。飲酒の場面やアルコールに関連する言及を17世紀イギリスの飲酒文化から考察すると、『オセロー』は単なる悲劇ではなく、節酒や禁酒を訴える芝居としての価値を見出すことができる。

『オセロー』は、最初の場面からアルコールの害が述べられている。飲酒により正気が失われると迷惑千万な行動を起こすことなど、アルコールの醸し出す毒性や飲酒によって導き出される失態がほのめかされている。更に、オセローの副官キャッシュオが飲酒で失敗する場面は、『オセロー』の登場人物の栄華と悲劇を二分している。オセローの勝利を祝うキプロス島での最初の晩、見張り役を任されたキャッシュオは、自身の酒の弱さを自覚しながらも、イアーゴの企みから無理に酒を勧められて酩酊し、剣を抜き、人を傷つけてしまう。そしてキャッシュオは、自身の意志の弱さを露呈するとともに、最も大切にしていた名誉をもアルコールにより奪われる。キャッシュオがこの事件を起こして以降、順風満帆に見えたオセローにも陰りが生じ始めるなど、事態のすべてが悪い方へと展開していくが、これこそがイアーゴが酒を利用して企んだ罠だったのである。事件に発展したキャッシュオの飲酒は珍しいことではなく、問題行動を起こした多くの酔っ払いの一例にすぎなかったのである。キャッシュオの姿は、無理に酒を摂取し、失態を犯した人々の姿を反映していると言える。

アルコールによる社会的な問題は17世紀のイギリス各地で生じていたが、イギリスにおける「問題ある飲酒の習慣」はこの時代に始まったことではなく、古代から続くものであり、飲酒に対する規制は、幾度となく行われていた。実際に、エリザベス朝からスチュアート朝にかけての教会の説教においても、過度の飲酒や酒浸りの恐ろしさが説かれていた。また、イギリスにおける飲酒量がいかに過剰であったかは、イギリスに存在していた居酒屋の数からみても明白である。1577年にはイギリス全土で24,000件の居酒屋が存在していたと推定されている。つまり、142人に1件、あるいはそれ以上の居酒屋が存在していたことになる。現に、イアーゴは自身の飲酒習慣を身に付けたのはイギリスであったことと、イギリスの人々の酒の強さについて語っている。

『オセロー』は、邪悪な男イアーゴに翻弄された將軍オセローの悲劇であると考えられるが、アルコールの害による悲劇の連鎖反応といっても過言ではない。そして、当時のロンドン市民が足しげく通った劇場で、アルコールが絡んだ事件や惨事や悲劇を伝えることこそが、『オセロー』上演の目的の一つだったと考えられる。